

令和 3 年 6 月 3 日現在

機関番号：23304

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02410

研究課題名(和文) 明治の能楽復興における華族の役割 前田家周辺からの再検討

研究課題名(英文) The role of aristocrats in the reconstruction of Noh in the Meiji era

研究代表者

西村 聡 (Nishimura, Satoshi)

公立小松大学・国際文化交流学部・教授

研究者番号：00131269

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：明治維新前後から約10年間における宝生九郎の活動を『梅若実日記』等により詳細に把握し、演能記録を広く集めて通説の不足を多数補った。その結果、従来明治4年とされた宝生九郎の板橋居住期が明治9年であることが判明し、金剛舞台の催しの年次に関する通説も多数修正することができた。また、大正6年12月、金沢・佐野舞台で催された臨時能楽の絵葉書20枚を入手し、新家元宝生重英来演の意義を再確認した。さらに、華族能を代表する前田齊泰・利鬯父子だけでなく、重臣前田土佐守家でも歴代当主が宝生流を嗜んだ様子を資料で跡付け、その成果を前田土佐守家資料館の企画展で公開し、本課題研究成果報告書(別冊)にまとめた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

明治10年(1877)は英照皇太后御所の舞台開きや、西南戦争後に招魂社祭能が行われ、明治政府による能楽復興への関与が本格化する年である。明治維新以来この頃までの能楽界の状況は資料が少なく、従来衰退期の印象が強かったが、本課題研究を通じて、華族邸における客人饗応、華族による能楽師舞台の見物、華族主催の催しと出演、華族から能楽師への舞台や装束の貸与・譲渡等を重ねて、華族が能楽復興の機運を醸成する役割を果たしたことが明確になった。なかでも前田家は初期には当主慶寧が、慶寧早世後はその父齊泰が、期間を通じて利鬯が、華族能の常連となったこと、重臣家の男爵前田土佐守家でも関心が持続することが確認できた。

研究成果の概要(英文)：We grasped the activities of Hosho Kuro in the 10 years from the Meiji restoration around the 10th year of the Meiji era in detail by using "Umewaka Minoru Nikki". We collected many records of Noh events and corrected the errors in the accepted theories. As a result, we clarified that Hosho Kuro lived in Itabashi in the 9th year of the Meiji era, not in the 4th year of the Meiji era. We have also revised a number of myths about the year of the Kongo stage event. We obtained 20 postcards of Noh event held on the Sano stage in Kanazawa in December 1918, and reaffirmed the significance of the new Iemoto (the head of Hosho school) Hosho Shigehusa, visiting Kanazawa. We have revealed in the material how the Maeda Family and Maeda Tosanokami Family enjoyed the Hosho style of Noh. We published our research results at a special exhibition at the Maeda Tosanakami Family Museum and compiled a report.

研究分野：人文学

キーワード：芸術諸学 中世文学

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の研究代表者は『金沢能楽会百年の歩み』上・下(共編著、2000・2001)や『大鼓役者の家と芸 金沢・飯島家十代の歴史』(共編著、2005)を編集・執筆する過程で、近現代能楽史を精細に動的にとらえるには近世能楽史との接続及び地方を視野に入れることが必要であり、にもかかわらず従来の研究は東京に偏していると思われた。研究対象を明治の能楽復興期に限っても、復興の中心にいた能楽社社員の多くは、東京に住むとはいえ旧藩主たちであり、幕藩体制下では各藩の能楽を振興する立場にあった。彼ら以上に優れた素人はいないとすれば、玄人役者たちが維新後生活に困窮するなかで催能の維持や芸の継承に果たした役割は極めて大きい。彼らは廃藩置県・華族令等により旧藩主の実権を奪われ、その矜持を新興勢力の得意としない能楽への親しみで保ったという見方ができる。前田齊泰(旧加賀藩主)・利鬯(旧大聖寺藩主、子爵)父子に代表される能楽社発起人たちの自負を解説したい。一方、能楽社社員の名前を見渡すと、齊泰の嫡孫利嗣(侯爵)や子の利同(旧富山藩主、伯爵)をはじめ、黒田長知(旧福岡藩主、侯爵)、鍋島直大(旧佐賀藩主、侯爵)を併せて4人が岩倉使節団に同行して欧米に留学している。使節団がベルリンの皇帝の劇場でオペラを見て能楽の価値(式楽としての利用価値)を再発見したことが、グラント米前大統領饗応の体験とともに能楽復興を促したという通説は、岩倉具視や久米邦武の個人的な衝動だけでなく、こうした若い旧藩主たちの帰国後の行動からも検証すべきであろう。さらに、旧藩主が不在となった旧領地では、幕藩体制以来の能楽はどのように継承されたのか、あるいは断絶したのか。そのことを、加賀藩の重臣家、いわゆる加賀八家(華族)が旧領地で(金沢でいえば金沢能楽会の結成に至る道筋)に果たした役割、そして下級の武士や庶民の謡稽古や催能への関わりから、地方における継承の基盤を考察するために、新たな資料を探索し、既存の資料を整備する研究計画を着想した。

## 2. 研究の目的

明治維新によって幕府・諸藩の扶持を離れた能楽師たちが再結集し、能楽復興を主導するようになる前に、その基盤は能楽社を結成した華族たちが整備した。能楽社の拠点が明治14年(1881)開設の芝能楽堂であり、岩倉具視や前田齊泰ら復興支援の第一世代は数年後に亡くなる。そのあたりを区切りとして明治前半の能楽復興に果たした華族の役割とその後の変化・推移を解明することを目的とする。幕藩体制下の式楽性が天覧能や華族能、外国人饗応能へと形を変えて、しかしその機能は継承されてゆくこと、欧米に派遣された岩倉使節団に若き日の能楽社社員(旧藩主)が含まれること、明治後半になると旧藩主の旧領地で旧家臣(華族級)が能楽復興の中心となることなどを検討し、地方からの視点と具体的な根拠により能楽復興の軌跡をとらえ直してゆく。

## 3. 研究の方法

池内信嘉『能楽盛衰記 下 東京の能』(1926)や古川久『明治能楽史序説』(1969)等の選考研究において、明治の能楽復興における華族の役割がどのように記述・評価されているかを詳細に把握する。『明治天皇紀』『昭憲皇太后実録』等を根拠資料として行幸啓能の歴史を体系的に把握し、それらに華族や能楽師たちがどのように関わったかを解明する。2度にわたる前田家行幸能は特に詳細な比較検討を行う必要がある。『明治の能楽』(1994~1997)所載の新聞記事や『梅若実日記』(2002~2003)の記述等から華族能・外国人饗応能の量的な把握を行い、華族が能楽を必要とした理由を考察する。雑誌『能楽』等、明治後半に記録された華族本人の回顧・証言類も当然根拠資料となる。岩倉使節団に同行して欧米に留学した旧藩主たち4人の事績を調査し、彼らがその後の能楽復興に東京及び旧領地でどのように関わったかを確かめる。藩政期以来明治の能楽復興まで、金沢・大聖寺・富山等では能楽がどのように継承されたかを、前田土佐守家等加賀八家の関与を調査し、また『起止録』『波吉能番組』等の資料を活用して明らかにし、他地方の状況と比較検討する。

## 4. 研究成果

(1) 宝生九郎が出演する明治維新前後の演能記録を広く集めた。柳澤英樹『宝生九郎伝』(1944)の不足を『梅若実日記』等により多数補った。その結果、特に版籍奉還(明治2年)や廃藩置県(明治4年)で上京する旧藩主たちが梅若舞台や金剛舞台に集結し、流儀を越えて芸の腕を磨きあい、往時を懐かしんだ様子が詳細に把握できるようになった。外国人饗応能のような政府の公式行事には五座の大夫が必要とされたが、単発的な公式行事よりも旧藩主たちの日常的な取り組みの方が、この先も能楽復興の実質的後押しとなる。能役者が離散し、芸の継承が危機に瀕する中で舞台経験の豊富な旧藩主たちが果たした役割は小さくない。特に藩主・藩知事退任後に生じた余暇を東京で消費する世代は、能楽社が設立される明治14年前後まで、岩倉具視傘下で能楽復興の主体たり続けている。明治9年の岩倉具視邸行幸能に出演する以前の宝生九郎個人については、様々な催しへの出演が明らかになり、従来明治4年とされた板橋居住期が明治7年であることが確実となった。明治7年に出演記録がないのは「能楽に対して野心を失った」(『宝生

九郎伝』)ためではなく、能役者として再出発する生活の基盤を立て直す(面や装束を焼失しない住所を探す)時期に当たると考えるべきであろう。明治6年の日本橋元大坂町と明治8年の深川吉永町とで、宝生九郎の役者生活に大きな変化はなく、出演機会は限られていても精一杯勤め、面や装束を整理・補充したり、地謡を任せる弟子を養成したりするうちに、能楽界全体が中絶期から脱出する流れが加速してゆく。岩倉具視邸行幸能は、前田齊泰・利邨や坊城俊政ら華族能の水準と、宝生九郎・梅若実ら五座の役者の水準の相違を、明治天皇や岩倉具視らに強く印象づけたはずである。その証拠に、宝生九郎はこれを契機に岩倉具視の仕舞稽古を指南するようになる。本格的な大夫芸の復権が待望される未来は、稽古能を続けた梅若実だけでなく、梅若舞台に出入りして華族能の現実に接した宝生九郎にも、日に日に近づく予感がしたと思われる。

(2) 宝生九郎は岩倉具視邸行幸能の行われた明治9年以降、英照皇太后の青山御所及び芝能楽堂の舞台開きがあった明治10年代前半を能楽の再興期と見なしている。その時期の宝生九郎の出演記録を収集して、従来の能楽史記述を多数補正した。岩倉具視邸行幸能の前年(明治8年)、根岸の前田齊泰邸で舞台開きがあり、梅若実が呼ばれて演能したのに、宝生九郎は呼ばれていない。宝生九郎は翌月の梅若家祖追善能に出演して、活動を再開する時期に当たるが、前田齊泰の姨捨演能をめぐる衝突がすでに生じていて、前田齊泰は宝生九郎の許しを得ずに演能を強行する。前田齊泰が稽古を受けた波吉宮門(紅雪)は同年10月に金沢の波吉舞台で姨捨を演じている。宝生九郎没後に波吉甚次郎(紅雪の子)が発表した文章には、前田齊泰の姨捨の地謡を勤めた巳野喜松・松林小三郎らが極力宗家を排斥したとされ、宝生九郎の再出発は前途多難と思われた。その時期の岩倉具視邸行幸能において、対立が続く両者の共演が実現したのは梅若実の苦心による。従来知られたことではあるが、諸資料を比較検討して事態の推移を詳細に再現した。また、梅若実の舞台と並び能楽復興の拠点となった金剛唯一の舞台にも、宝生九郎はたびたび出演していた。金剛舞台は明治11年までは麻布飯倉にあり、同年9月、芝宇田川町の新舞台の開きを行い、明治13年には神田小川町稲葉子爵邸内に移転して間もなく火事に類焼した。こうした金剛舞台の変遷を知る基本史料として『明治能楽史序説』には法政大学能楽研究所蔵の番組を多数紹介している。その内、年次不明とする5点につき年次を明らかにし、3点につき年次の推定を訂正した。これらを含めて11点を、『宝生九郎伝』の「宝生九郎年表」に追加することができた。宝生九郎の金剛舞台への出演は深川吉永町に居を構えた明治8年から始まり、活動再開の場所を梅若舞台以外に金剛舞台にも確保していたこと、明治9年からは両舞台とも宝生九郎の出演回数が一挙に増え、活動を本格化させて能楽再興の先頭に立つ勢いを見せることが分かった。宝生九郎は明治維新による能楽中絶期の渴きをいやすように、徳川幕府の大夫とは異なる舞台の活動を、観世清孝が帰京して能楽界に復帰するこの時期まで慎重に趨勢を読み、岩倉具視邸行幸能を機に猛然と始めた観がある。梅若舞台には宝生九郎と対立する前田齊泰や巳野喜松らも頻りに足を運んでいた。宝生九郎にとって金剛舞台が存在した意義は、単に出演機会の量的な拡大だけでなく、梅若舞台に依存する心理的負担を軽減したことにも認められるであろう。明治11年には英照皇太后の青山御所に舞台が作られ、演能のために観世清孝・金剛唯一・宝生九郎・梅若実・三宅庄市の5人が御能御用達に任命された。この5人はこれに先立つ同年1月の岩倉具視邸舞台開きにも出演したことをはじめ、他の華族邸内の催しへの出演依頼も御能御用達に集中する様子がかがわれる。その一方、宝生九郎と前田家の距離は相変わらず縮まらない。前田齊泰邸・前田利嗣邸の催しに観世清孝や梅若実が招かれるのに、宝生九郎は招かれない。明治12年の前田利嗣邸行幸能には宝生九郎の出演がようやく実現するが、御能御用達の宝生九郎を天覧に供さない不自然さが考慮されたのかも知れない。宮内省から御能御用達を拝命した5人は、同じ時期、陸軍省からの働きかけにより、招魂社大祭へ出演が恒例化する。従来の近代能楽史記述には殆ど言及されてこなかった事実であり、西南戦争終結後、能楽の保護が複線的に進むことにさらに注目すべきである。

(3) 宝生九郎は大正6年(1917)に死去する。その跡は分家宝生嘉内家の次男重英が継承する。重英自身は実父宝生嘉内の転任先の京都で生まれたが、宝生嘉内は金沢の町役者2世野村蘭作の子として生まれ、慶応2年(1866)に宝生九郎の内弟子となり、明治元年(1868)に宝生嘉内家を相続した。それより少し早い文久2年(1862)から翌年にかけて、金沢には宝生九郎の父宝生友于(紫雪)が最晩年を過ごしている。その縁がかえって宝生九郎と金沢の関係を複雑にした事情については諸説行われている。しかし、大正6年に金沢出自の新家元が誕生すると、家元と金沢の距離は急速に縮まってゆく。金沢能楽会ではさっそく歓迎の準備が進み、年内に新家元一行を招聘する臨時能楽を佐野舞台で催している。その時の舞台写真の絵葉書20枚を入手した。佐野舞台の演能写真は明治44年(1911)に金沢で創刊された雑誌『能楽時報』の第2号をはじめ、時々同誌に掲載されているので、この絵葉書が最古の写真というわけではないが、大正8年1月の金沢能楽会第200回祝賀能楽の佐野吉之助 翁 や、同年4月の佐野吉之助最後の松風など、よく知られた写真より1年以上早く、かつ東京の宝生流幹部や著名な三役が多数写っているという希少性が認められる。また、絵葉書にはシテを演ずる者の名前しか記載していないので『金沢能楽会百年の歩み』上巻掲載の番組と照合することで、宝生新・藤田多賀蔵・川崎利吉らの大正6年当時の面影が知られる。東京から来演して 葵上 を演じた近藤乾三は、先代佐野吉之助の 俊寛 に佐野巖が成経役で出たことを50年後に回顧しているが(『能わが生涯』)、当時の番組にはツレや地謡の演者名を記載せず、この証言により絵葉書 俊寛 に写る成経役が佐野巖であると判明する。佐野巖は大正8年7月に上京して宝生重英の内弟子となる。そのきっかけは同年4月の佐野吉之助の病死と、同年6月の宝生重英の来演であったことが想像される。大

正6年末の臨時能楽以降、昭和7年の金沢能楽堂の舞台開きまでは15年、その間、佐野舞台では宝生重英の来演が9回あり、松本長は7回、野口政吉と近藤乾三も各4回来演している。東京も金沢も世代交代が進み、金沢ゆかりの宝生重英や松本長が流儀の中心となり、東京幹部の来演や金沢の能楽師の上京が頻繁になる過程を、佐野舞台が静かに見守り続けたといえ、絵葉書20枚はそのあかしとなる。

(4) 従来の加賀藩能楽史研究では藩主の演能、城中の催し、御手役者・町役者・御細工者の役割、神事能などが対象となってきた。藩主以外の武士が能楽をどのように受容したかは、具体的な言及がなされてこなかった。そこで加賀藩重臣前田土佐守家(上級武士)と下級武士の中村豫卿に注目して藩主以外の武士の受容を確かめることとした。まず、前田土佐守家に伝来した能楽関係資料を調査すると、番組(幕末の江戸城の催しの番組が殆ど)、能型付・仕舞付(6代直方、その子直養の代のものが多い)、宝生流入門免状(享保19年~明治8年)、謡本(宝生友精自筆 道成寺)などに整理できる。特に に関しては、5代直躬が6代藩主前田吉徳の参勤に供奉して在府中の享保19年(1734)、宝生丹次郎(11世友精)に入門し、帰国後は書面によって指導を受けていたことが、7通の書状の写しによって判明する。直躬は月に1回ぐらいの割合で装束を着けて稽古を行い、その番組を宝生友精に報告している。そうする義務があったと推測される。6代直方の子、直養は天明8年(1788)、父6代直方が11代藩主治脩の参勤に供奉するのについて江戸へ出、在府中に13世宝生友勝に入門した。入門のために父直方が用意した金品も記録されている。帰国直前に 乱 を伝授された時に父子で用意した金品についても同様である。直方自身は脚気を患い入門していない。7代直時以降の当主も早世が続き、入門の機会を逸したと見られる。なお、本研究課題報告書(別冊)にこれらの関係資料の内、主要なものを翻刻し、別に直養の日記『覚書』の翻刻も連載公表している。前田土佐守家では10代直信の時に明治維新を迎えるが、明治8年から9年にかけて、加賀藩の御手役者であった波吉宮門(紅雪)とその子甚次郎から 姨捨 等の謡、八景 ほかの乱曲、竹生島船中 等の素仕舞の伝授を受けている。姨捨 については上述の前田齊泰の稽古や齊泰・紅雪の演能との関係が推測される。下級武士中村豫卿の日記『起止録』は天保13年(1842)から明治17年(1884)までの長期にわたる。その記述から、下級武士の間で日常的に謡が行われ、社交の手段とされていたことが分かる。特に嘉永4年(1851)から翌年にかけて、中村豫卿は卯辰山中腹の春日望湖楼で行われた謡講に毎月参加し、講番を務めたこともある。その頃は、茶道・花道・馬術・剣術などにも取り組んでいて、謡も若い下級武士が身につけるべき教養の一つと見られていたようである。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 西村 聡	4. 巻 12
2. 論文標題 アイの語りの分際（下） 後シテの語りと比較して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 金沢大学歴史言語文化学系論集言語・文学篇	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 竹松 幸香	4. 巻 17
2. 論文標題 前田土佐守家準代前田直養の日記『覚書』（翻刻）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 研究紀要（財団法人金沢文化振興財団）	6. 最初と最後の頁 19-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 西村 聡	4. 巻 54
2. 論文標題 金沢・佐野舞台の大正六年 新家元の来演を写す絵葉書から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 宝生	6. 最初と最後の頁 26-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 西村 聡	4. 巻 11
2. 論文標題 アイの語りの分際（上） 前シテの語りと比較して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 金沢大学歴史言語文化学系論集言語・文学篇	6. 最初と最後の頁 33-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 竹松幸香	4. 巻 16
2. 論文標題 前田土佐家準代前田直養の日記「覚書」(翻刻)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 財団法人金沢文化振興財団研究紀要	6. 最初と最後の頁 7-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西村 聡	4. 巻 10
2. 論文標題 御用達宝生九郎の誕生 能楽「再興」期年譜考証の更新	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 金沢大学歴史言語文化学系論集言語・文学篇	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 西村聡	4. 巻 69
2. 論文標題 『源氏物語』で語る源平合戦 須磨人平家の憂愁と墓標	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 石川教育展望	6. 最初と最後の頁 34-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計2件(うち招待講演 1件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 西村 聡
2. 発表標題 能の地謡と結末の現在
3. 学会等名 金沢大学国語国文学会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西村 聡
2. 発表標題 ワキの夢とアイの語り - 芭蕉 論から見え始めたこと -
3. 学会等名 日本比較文学会関西支部大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 木越治・勝又基・西村聡ほか計26人	4. 発行年 2018年
2. 出版社 国書刊行会	5. 総ページ数 488
3. 書名 怪異を読む・書く	

1. 著者名 佐々木香織・西村聡ほか計9人	4. 発行年 2018年
2. 出版社 金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究センター	5. 総ページ数 132
3. 書名 古典演劇研究の対象と視点	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>本研究課題研究成果報告書として、竹松幸香分の研究成果を「加賀藩重臣前田土佐家における能の享受について」としてまとめ、別冊とした(全26頁)。特に、前田土佐守家伝来の能関係史料の主要なものを翻刻し、多くは加賀藩時代のものであるが、10代直信が波吉紅雪・甚次郎から 姨捨 の謡の伝授を受けたことを示す免状は、本研究課題にとって重要である。</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	真柄 幸香 (竹松幸香)  (Magara Yukiiko)  (60727759)	合同会社AMANE・調査研究ユニット・客員研究員     (93301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関